

俳句

〔上山(大正)句会 (4月)〕

桃の花人に言われぬときめきも

中平 ひろ武

色褪せぬ夢は夢なり別れ霜

伊与木 秀子

春愁や漢方薬のふた包み

中森 鶴子

しぶき割り瀬音巻き上げ春疾風

藤原 佳代子

菜の花を抱ける女おさな顔

徳広 せいお

山鳩よ朝のげんげ田匂い濃し

森本 千富

だんだんと近くなるよな春の星

田辺 富子

晩学の身につかずしておぼろ宵

井野谷 北斗

すかんぼや金平糖の隠れんぼ

曾根 克平

短歌

〔窪川短歌教室〕

待ち合い室にシクラメン一鉢置かれたり

病者にまふし真紅でありぬ

風車まふ山懐の古き家

軒に楮の束干してあり

足腰の痛きは八十路の勲章と

札所大窪寺に友と杖ひく

朝より大豆を蒸して味噌仕込む

夫と小二の孫の手かりて

さくら咲く丘より眺むふるさとの

町のはたてに光る四万十

〔窪川句会〕

五月雨一言添えし置き土産

渡辺 小梅

わづかなる風の気配や春の昼

市川 令子

四万十川に浸け虎杖の塩を抜く

田中 一柿

大橋も霞の中の播磨灘

棚野 照

新緑に輪塔明し古利かな

戸田 美智子

さぐり読む先師の句碑や苔の花

野坂 安意

此の時越せば故郷花霞

池 和子

市川 令子

岩井 房子

上岡 富子

北村 さちこ

笹岡 誠子